感想

佐藤 信

ＯＭＳ戯曲賞は二十五周年を迎えた。四半世紀、自分の人生の三分の一、と振り返ってみると、これはこれでひとつの「歴史」とでも呼びたくなるような軌跡が、いつの間にか描かれているらしい。ＯＭＳ戯曲賞はどんな意味でも「権威」にはなりたくない。関西の劇作家と、彼らとともに舞台をつくる演劇人、劇場人への、声を限りの応援団でありたいと思いつづけてきた。選考委員ひとりひとりが、現役の劇作家として、あるいは演出家として、自分の立ち位置と志向を、候補作とその作者に真正面からぶつけて議論する。選考委員会の雰囲気は、二十五年間一貫してぶれたことはない。

選考会の話題にもなったが、今年の最終選考会に残った候補作の大半が、「経済的な困難」、あるいは「介護」や「死」という共通の主題を取り扱っていた。「経済的な困難」、ようするに「貧困」の問題について、これほど多くの書き手が着目したのはＯＭＳ戯曲賞はじまって以来はじめての出来事と言っていい。マスメディアが伝える表層的な世間の動向とはかならずしもシンクロしない、その底流にある「現実」の様相に、演劇の嗅覚が敏感に反応した結果だと思う。「介護」や「死」という主題にしても、ほんらい享受するはずの「生命の自由」を、その最深部から根こそぎ奪われていく「貧しさ」の感覚に由来しているのは間違いない。

さまざまな物語とさまざまな技法を通して描かれた八編は、「実際に上演がおこなわれたテキスト」というこの賞の個性を反映して、どの作品も、いま目の前にいる俳優をつよく意識して書かれたテキストだった。選考委員のひとり生田萬さんから指摘のあった「ト書き」についての指摘も、そのことと関連していた。生田さんの「最後に」と断ってからの熱弁を聞きながら、はるか昔、自分が芝居にかかわりはじめた頃、周囲でさかんに議論されていた、「台本派」「戯曲派」の議論を思い出した。俳優の具体的な肉声を通して「観客」という第三者に伝えようとするテキストか、あるいは文字としてひろく「読者」という第三者に伝えようとするテキストか。当時台頭してきた小劇場の書き手たちはこぞって「台本派」として評価され、またそれゆえに批判されもした。

今回、大賞を受賞したくるみざわしんさん『同郷同年』もまた、演じる俳優たちのためのテキストとして魅力的だった。場面を時間経過の中でさまざまな使われ方をする薬局の待合室に固定、登場人物を同郷同年の三人の男たちに限定、という明快なしつらえは、おそらく演出家を差し置いて、まず何よりも演じる俳優たちのこころをそそる。

テンポよく交わされるせりふで運ばれる物語の背後に、作者のリアルへの的確な視線を感じる。地滑りのような変化を遂げる不安な世相の中で、あらゆる異議の矛先はかならずおのれ自身の胸元にかえってくるという苦い切実感として、その視線は、われわれの「貧困」の基底に確かに届いている。演劇ならではの力を借りて、この「現実」を豪快にひっくり返す文字通りのフィクションまであと一歩、くるみざわさんの次回作に期待したい。

佳作の山本正典さん『あ、カッコンの竹』もまた、俳優の生き生きしたせりふが聞こえてくるたのしさのあるテキストだった。竹藪全体がひとつの生命体という着想と、『あ、カッコンの竹』という音が聞こえてくる題名との呼応が快適だ。

他に、中川真一さん『Round』、横山拓也さん『粛々と運針』の二作にこころが残った。詳細については、いつものように丁寧に書かれた九鬼葉子さんの「選考経過」を参照していただきたい。